

浄土

1980-7

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別送達郵便物）認可
昭和五十五年六月二十五日印刷
第四十六卷
第七号



いざという時のために

月日が経つのは早いものだ。その日暮しをしているうちに、今年もすでに半分が過ぎてしまった。この間の生きざまは、と問われれば、相変らずの不甲斐ない日々の繰りかえしとしかいいようがない。



それでも、生まれて初めての貴重な体験によって、生きることの尊さ、大切さを味わい得た。それは、虫垂炎

の手術を受けたことである。五月七日の夕刻のことで、翌日から中国旅行を予定していただけに、生命拾いの手術をしたことになる。五日の晩から右脇腹に鈍痛が走り、翌日も続いた。二週間の旅行をひかえていたので、念のための検査を受けたところ、どうも怪しいということになった。散ら

して行くか、それとも中止するか、判断をつけかねた。行つて迷惑をかけるより、ここは一つ私に任せなさい、という医者のお勧めで、即入院、執刀となった。正解であった。医者曰く「ちょうど切り頃、放置していたら、あと二日ほどで破れ、腹膜炎を起し、どうなっていたかわからないところだった」と。

適切な判断と処置をいただき、おかげさまで手術後の経過は良好である。

虫垂炎の手術ぐらいで大袈裟だ、といわれるかも知れないが、初めて身体にメスを入れ

た身になれば大真面目。麻酔が醒めたときの痛みから、生きることの苦しさ、むづかしさを教えられ、我慢し得たときには、生きることの喜びを味わったような気がした。

人生は、よく歯車に譬えられる。それは、人生が着実な回転を求められているからである。功をあせつたり、また怠けたりする、いわゆる緩急いずれでもギヤは外れ、落伍することになる。かといって、メトロノーム的人生では味気ない。なんとか、己れに適したギヤ調整ができるようにしたいものだ。それも自然に調整できることが望ましい。

そのためには潤滑油が必要である。何がよい油かひとそれぞれで、おのづから違う。そこで、より良きものを求めている訓練が必要となってくる。

幸いに私たちは「お念仏」という良油を持ち合せている。苦しいときの神頼みのなものではなく、平生から心掛け、いざというときに生かすことができるよう、臆することなくこの良油を完全燃焼させ、悔いない人生を送りたい、こんな思いが募った私の入院生活であった。

(長谷川宣丈)

七月号



水火の二河と言うは、すなは
ち衆生の貪愛は水のごとく、
瞋憎は火のごとくに喩う。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.121)

目次

法話

お盆を迎える心……………北山良祐……(2)

特別寄稿

浄土への道しるべ……………村下武司……(16)

お盆俳談……………細田隆善……(7)

みずからを反省する心……………丸山博正……(12)

旗と鍵

アメリカ留学から帰って……………大南龍昇……(21)

〈連載〉

一つの道(一)

一わが教えの子のこと……………戸川霊俊……(32)

〈信仰への道〉

仇を拜まれた法然さま……………尾田秀童……(26)

浄土句集……………一田牛畝選……(30)

〈表紙のことは〉芋タ立……………土屋正男……(25)

〈表紙裏・巻頭言〉いざという時のために……………長谷川宣丈

念仏ひじり三国志⑤——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

お盆を迎える心

きた やま りょう
北 山 良 祐

(焼津市光心寺住職)

○愚につかぬ理屈

私如き者が、何を思いようが、思いますまいが、読者の皆さんとは、何の係りもないことです。ところが係りのない人であっても、知名度の高い人の「思うこと」といえば、読者も読む気を起すものです。読者自身の精神状況との対比等において……。

然し、人生を考え、人生を憂うるなどということは知名度ある者のやることで、知名度のない者のやることではないということは決してないのであって、否、むしろ知名度なき者

の中に、真面目に真剣に、人生を考え、人生を憂うる者があるかも知れないと思うのであります。少くとも私自身は、そう信じて人生を歩んでいます。

私の人生の処し方、歩み方を他人さまに知っていただきたいとは思わないし、知っていただく必要もないのであって、私の人生は、私の人生であって、私自身が納得し、私が信ずる人生を歩めば良いのであります。二度とない人生と受けとれば猶更のことです。

然し、必要があつて書く、特に『浄土』誌

掲載ということを書くとなると、読者の皆さんに読んでいただくことを前提にしなければならぬことを考え、先づ最初に私如き者の書きものでも読んで欲しいことのために、愚につかぬ理屈を斯く述べた次第であります。

○人生の軌道修正

“人生はお先真暗” “一寸先は闇”という言葉は、人生の歩みの一面の実相をいいあてたものだと思います。

アポロやソユーズは、見える目標〓月に向かって発射されるのであります。それにもかかわらず、軌道修正が行われないと月に到達しないということは、ご承知の通りであります。見える目標に向かって発射されたのに軌道修正が必要なのです。

見えない人生行路〓お先真暗・一寸先は闇の人生に軌道修正がなくてよいでしょうか。

人生の目標〓終局は“死”であって、軌道修正しようと、しなかりうと時期が来れば、

死ぬのであるとするならば、それは、もう何も云う必要はない。そのような人生は犬猫と何等変らない生き様であります。若し、人間を霊鳥とうけとり、聖なる目標に向かって歩むことが人生の人生たる所以である、とするならば、その人生のお先が真暗闇であるとしたならば、その人生の歩むべき道はまさぐりまさぐり一步一步訂正しながら歩んでいかねばならないことは云うまでもないことです。

アポロやソユーズが、お月さまに対して軌道修正されることの必要がある以上に、お先真暗闇の人生において、間違いない人生の目標に向かって進むためには、人生の軌道修正が必要であると信ずるのであります。軌道修正のないものに正面な人生が歩める筈がない、云いかえれば信仰のない者に人生を着実に歩むことは出来ないということになると思います。何故かなれば、信仰は回心を伴うものであります。回心は心の方向転換ということとであります。方向転換は軌道修正に通じま

す。その故に、回心＝信仰ない者、即ち、軌道修正のない者は人生を全うすることは出来ないといえると思うのであります。

軌道修正のためには、現在を、そして、現在に至る迄のことに対する厳しい見つめこそ大切であります。その見つめは、反省（善導大師は懺悔を強調された）このことは、後述する）という言葉に置き換えたことができると思えます。人生の軌道修正があるためには、人生に対する厳しい見つめ＝謙虚な反省が、その基底にないとはできないものではないと思います。

○もう一つ深く見つめる

（真の反省とは？）

某日、少し長い距離をハイヤーに乗って行った時のことですが、常に茶人帽をかぶっている、その日も茶人帽の私を、運転手と人が直ぐに、お坊さんに見受けたらしい。それで仏教について、いろいろ尋ねられた。ヤクザ稼業と思われ易い運転手さんが、世相を

歎じているのをうかがって、何か私は心ほのぼのとしたものを感じたことです。そんなことだったので私も大いに語りたい気にもなったことです。時偶、「反省」ということになったので、

「運転手さん!! 反省といっても、反省の仕方がありますよネ!!」

「どんなふうにですか」と反省された。

「運転手さん、この車は何の力で走っているのかネ」

「それは、油ですよ」

「そうネ、油だよネ、その油は何処から出るのかネ」

「スタンドで入れますよ」

「スタンドで入れるのは分かっているが、そのスタンドの油は、どこから出たものかネ」

「サウジアラビアかイラン・イラクから運んで来たのでしょネ」

「そうだネ、サウジ等産油国から運ばれて来るのですよネ。その産油国の石油は、どこか

ら出るのかネ”

”地下から出るのです”

”そうですね、地下資源ですよネ”

小学校児童の対話のようなことで、もう少し対話が続いた。

”さて、運転手さん、この車は、どこを走っているのかネ”

”目的地に通ずる道路ですよ”

”道路は判っているが、その道路は、どこにあるの?”

”地面上にありますよネ”

”そうだよネー、地面上にあるのだよネー”

禅問答のような対話の挙句に、私は、

”運転手さん、あなたの車の走っている下には、あなたの車が走る力であるガソリン、地下資源があるのです。その地下資源をいたいて地下資源の上に敷かれた道路を走っているわけよネ。いいかえると、ガソリンのお蔭をいただきながら、そのガソリンを踏んづけて走っているということになる。時には、偶

には『ガソリンさま申しわけございません』といった気持ち位になった方がいいのと違うだろうか。そのような気持ちをもてば、資源の無駄使いはしないだろうし、やがてそのことは交通事故や公害の減ることに通ずると思うのです。

運転手さん!! 『反省』とは、そこまでいかないと本ものにはならないと思いますよ”

運転手氏は、

”和尚さん方は、そこまで考えるのですかと、えらく吃驚りしていたことです。

『反省』という一事の例を車にとったままで、すよ、といったところで目的地に着いたので、お互いに礼をいい交しながら降りしていただいたことでした。

真に反省したら、私共の生活の中には、思いがけない、生活のすばらしい転換があるかも知れないと思います。足袋職人だった故石橋正次郎翁、かつて足袋を造りながら濡れない底の足袋(地下足袋)の考案から、

遂にブリッヂストーン会社を築き上げられたのであります。厳しい生活の見つめ「反省から、すばらしい発創の転換アイデアが生まれ、発展のあることの尊い実例であります。

○人生、生涯が修養である

人生は、一生涯修養だといわれます。厳しい生活の見つめ(反省)をしたら、人生、至らないところだらけ、だと思えます。それを直していかう、訂正していかうということが人生の軌道修正ということです。そうすると軌道修正は一生涯せねばならないこととなります。正に一生涯、修養だということと全く同じことです。

善導大師さまは、厳しい自身の見つめの結果、罪惡生死の凡夫と痛感され、懺悔に徹底されます。そのような罪深き人間でも、阿弥陀如来さまのご本願の念仏によって救われると信じ、念仏の行者に徹せられたのであります。このことから、私達は自分が力弱い者だ

との見つめを深めれば深める程、信仰への深化があると信ぜられるのであります。

パスカルは「人間は考える葦だ」といわれたそうです。誠に私達は葦のように弱い、ちよつとしたことでヘナヘナと倒れてしまいうる不安定な存在です(それなのに、なりあがつて自然を征服するなどの生意気なことをやらかすものだから自然破壊にその公害や災害のトガメが出て来る)そのような、か細い私達を転ばぬように、倒れぬように支え、護念^もって下さるのが阿弥陀さまのご本願によるお念仏であると受けとらしていただければ、少しはお念仏を申さずには居れない気持ちになってくるのではないでしょう。か、そんなことで多少お念仏を申せられる昨今の私であります。その私が人生に思う思ひようを、時丁度、お盆という信仰導入のこよなき機会にあたつて、編集者のご指令にもとづいて、「もう一つの思ひのとりよう」として申し述べさせていただきます。いた次第であります。

お盆俳談



若葉して御目の垂ぬぐはばや

芭蕉

芭蕉は貞享五年（一六八八）四月八日（現在の五月）、奈良に遊び、新樹若葉の美しい唐招提寺に詣で、いくたびも来朝失敗苦労したため失明までした鑑真和尚の木像を拝し、若葉で涙を拭いてあげたい気持ちをこの一句に托した。芭蕉文学の形成には唐の詩人の影響が強い。その唐代の高僧を偲び芭蕉みずから感激の涙を絞った句でもある。この芭蕉句碑は同寺にあるが、このたびはじめて鑑真像が中国に里帰りし、中国において熱烈な歓迎を受けたとき、この芭蕉の句が四月二十八日の人民日報に登載され、中国語に訳されて中国の人々に多大の感銘を与え

ほそだりゅうぜん
細田隆善

（東京三好勢至院住職、俳号豊明）

た。俳句がわが国特有の文芸であり、季節という季節感を持ち、幽玄枯淡な寂を持つことが、人々の心を捉えるものである。

今回はお盆に因む俳句観賞であるが、昔は旧暦であるので一カ月遅らして観賞する必要がある。都会は七月がお盆であるが、旧盆を行なうところも少くない。お盆は初秋の季節、俳句は五、七、五の韻律と季節を入れることが条件である。

孟蘭盆や暮れて猶啼く蟬一つ

竜雨

端くれに貧者の一灯盂蘭盆会

かけい

盂蘭盆や東京にある妻の墓

竜男

お盆は彼岸とともに祖先の霊を供養する行事で、もつともひろく普及した仏教行事である。お盆は盂蘭盆、ウランバナ、倒懸（苦しみ）という語の音訳である（一説にイラン語系のウランバナ、済度の意ともいう）。釈尊の弟子目連尊者が亡母の倒懸の苦しみを知って、釈尊の教えによつて、七月十五日供養を行なつて母を救つた故事に基く。お盆は、七月十三日、迎え火を焚いて祖霊を迎え、精霊棚を飾って供養し、十五日（または十六日）、送り火を焚いて祖霊を送り、墓参をする行事である。

推古天皇十四（六〇六）年七月十五日、寺々に盆棚を飾り、ついで斉明天皇三年（六五七）七月十五日、飛鳥寺において盂蘭盆会を行なったのが、お盆の最初である。のち次第に民間に普及するようになった。

御仏はさびしき盆とおぼすらん

一茶

女童（めわらべ）らお盆うれしき帯を垂れ

風生

盆布施のきばってありしちとばかり

静雲

お盆は七月七日の七夕から始まる。これを七日盆といつて盆行事の始めとし、虫払い、墓掃除、金物磨きなどをやる。お墓から精霊が里に来易いように道の草を刈るのを、盆路、精霊路という。

送縁の悲しみに堪へ盆用意

夢汀

風知りて鳴る熊笹や盆近し

視草

越後路や海辺の墓の盆支度

吐天

七月十一日、お盆に供えて花を採る日とし、盆花、花取日、精霊花という。お花取り、盆花迎え、盆花折などともいい、町では盆花売が始まる。盆花の代表は溝萩である。溝萩は三尺ほどの草、披針形の葉を持ち、葉の節ごとに紅紫色の六弁の小さい花が輪生する。この溝萩で盆棚の供物に水を注ぐ。めど萩がみそ萩に転じた。めどは箸のこと、精霊に水向けをする箸の役であるからである。

みそはぎや水につければ風の吹く

一茶

鶉の小屋のほとり溝萩咲きにけり

順円

家遠しみそ萩つむは孤児か

露伴

七月十二日夜、盆花やお盆に必要な品々を草市（盆市、花市ともいう）に買う。溝萩、蓮の葉、真菰、真菰の馬、茄子、胡瓜、鬼灯、青葡萄、芋殻、土器、灯笼などを買う。

先匂ふ真菰薙や草の市

白雄

草市ややがて行くべき道の露

虚子

草市や寄る年波の鬼灯屋

桂子

七月十三日宵、門口において炮烙に芋殻を焚いて精霊を迎える。それを迎え火（門火、魂迎え、精霊迎、精霊火）という。芋殻は皮をはぎとった麻の茎を干したものである。

風が吹く仏来給ふけはひあり
迎火やはそき芋殻を折るひびき
迎火や父に似た子の頬の明り

虚子

水巴

子規

お盆のことを魂祭（霊祭、玉祭）という。み魂は、仏教以前から祖霊の神々のみ魂を迎えることから起きた言葉である。

数ならぬ身とな思ひそ魂祭り

芭蕉

と芭蕉がこの季題を使ったことから、数多くの魂祭の句が読まれた。元禄七年（一六九四）五月、芭蕉は深川芭蕉庵を寿貞に守らせ、その子の次郎兵衛を連れて関西に向った。六月京都落柿舎にあって寿貞の死を知り、この句を吟じた。寿貞は芭蕉の若いときの女性であったという。僧形に身を托した出家同様の芭蕉は寿貞を妻とするわけにはいかなかった。芭蕉は旅を棲家とし、家庭を持たず、世俗を捨ててひたすら寂の文芸を追求した。寿貞は、のち芭蕉を頼って江戸に出てきた。病身不遇な寿貞を見捨てることの出来ない芭蕉の人間性がこの句に出ている。寿貞の死後四ヵ月して芭蕉は寿貞の後を追うがごとく、十月十二日没した。

母人^{ははひと}や病をおして魂まつり

きのふ見し人や隣の玉祭

児を抱いて尼美しくしき靈祭

枌童

其角

蛇笏

お盆の精霊を祀った台を、精霊棚、盆棚、魂棚、玉棚
という。

玉棚の奥なつかしや親の顔

魂棚や上座して鳴くきりぎりす

母迎ふ魂棚造ねんごろに

去来

一茶

秀峰

この盆棚の前での菩薩寺僧侶の読経を棚経という。棚
経僧は一日何十軒も回らなければならないので、読経は
五、六分である。

棚経やあいさつもなく戻らるる

棚経を逃尻^{にせり}でよむ法師かな

棚経の僧にころげし西瓜かな

宗居

一茶

五空

お盆は亡き精霊を供養する行事であるが、生きている

ことを感謝する日でもある。一族肉親が健在であること
を仏や先祖に感謝することを、お盆の生身魂^{いみみたま}、生盆^{いみぼん}、生
見玉^{みたま}、生御魂^{いみみたま}などという。

生身玉やがて我等も孤の上

身代^{しんだい}の傾く中に生身魂

生身魂きざす涙を笑い草

一茶

竜雨

青畝

生身玉には蓮の飯、刺鯖^{さしさば}などを供える。蓮の葉に糯米^{もちこめ}
を蒸したものを供え、来客に供したり、ところによって
は刺鯖を添えて出す。

蓮の葉に盛れば淋しき御飯かな

蓮飯の香に眼を開く仏かな

また命鯖そへけりな蓮の飯

一茶

松宇

信徳

また精霊棚には、茄子や瓜に芋殻の足をつけ、馬や牛
を作って供える。迎え火日と送り日には馬の向きを変え
る。

さし汐や茄子の馬の流れ来る
茄子の馬あと脚のべて夜明けたり
湖波にあはれ仰向く茄子の馬

一茶
青陽人
風生

七月十五日または十六日の宵闇が近ずくと、精霊を送るために火を焚く。このことを送り火、魂送という。焚くのは芋殻、藁などさまざまである。「このあかりで、おかえりやれ、おかえりやれ」と子供たちは唱えながら送り火を焚く。

送り火の跡あはれなり虫の声
送り火の明り先なり角田川
生涯に妻は一人や魂祭り

桃隣
一茶
豊淳

さらに、お盆の行事として十五日または十六の夜、精霊を送るため川、湖、海へ灯籠を流すのを灯籠流し、流灯、精霊流、精霊舟といい、これはまことに風情のある行事である。

灯籠の消ぬべきいのち流しけり

万太郎

灯籠の別れては寄る消えつつも
流灯の一つに父と母の霊

亜浪
波津子

お盆に因む季題と俳句は、このほかにまだ数多くあるが、今はこの辺にとどめる。

〓新刊〓

總本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願
布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —
○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。

B 6判 二四〇頁 価一五〇〇円
(申し込み先) (一六〇〇円)

〒 381-12
長野市松代町東寺尾三八一

長 明 寺
振替(長野) 一四三二二

みずからを反省する心



まる やま はく しょう
丸 山 博 正

(大正大学専任講師)

この三月十四日、私も善導大師の千三百年遠忌にめぐりあうことができた。千二百五十年遠忌の時は私はまだこの世に存在しなかった。次の千三百五十年遠忌の時はもし生きていたら九十代の老人であるが、おそらくはめぐりあえないであろう。そう考えると千三百年遠忌は私にとっても、まことに意義深く、ますますありがたいことと思われてくる。浄土宗ではすでに数年前から遠忌を記念して善導大師に関する研究本、解説本が刊行され、各種の講習会などでも善導大師を中心とした企画が圧倒的に多かったようである。さらに加えて中国神禾原の善導大師墓塔への参拝という夢が実現し、大師への関心は最高潮に達したといえよう。

こうした善導大師に関する話題の一つに偏依善導論がある。善導大師と法然上人は同じであるとかいや両者は相違するとかいう議論もあるようである。いうまでもなく法然上人は「偏^{ひとへ}えに善導一師」によって浄土宗を開かれた。このことは法然上人の名著『選択集』の最終章に述べられている。法然上人にとっては善導大師は開宗の恩人であり、自分が開宗に踏みきれたのは善導大師のお蔭であるという自覚の端的な吐露が「偏依善導一師」で

あったろう。そのことと、善導大師と法然上人のすべてを比較して同異を探ることとは次元が別である。時代も国も違う両者がすべてにおいて完全に一致することなどはありえない。「偏依善導論」と「善導・法然比較論」の混同がこの問題を必要以上に複雑にしている傾向があると思われるが、いかがであらうか。

去年今年貫く捧の如きもの

高浜虚子晩年の句である。昭和二十五年十二月二十日作というから虚子すでに七十代の後半である。「旧年・新年を通して一つの感慨が八貫く捧の如きもの」という表現を生んだ。新年と言って、別に改まった喜びがあるわけではない。老いの感慨である。一見無造作な表現の中に、的確なものをつかんで、大胆にずばりと言っているところがよくい。作者の感慨が、一本の捧のようなものとして、具体的なイメージとして提出される。去年も今年も、変わりはないのである。ただ、一本の捧のように、かくべつの波瀾もない過ぎゆく月日が存在するだけ

である。老虚子快心の作であろう」とは山本健吉の評である（『現代俳句』）。たしかに老虚子の感慨がずばりと表現され、一種人を唖らせたつづやきのように聞こえる。しかし、最初に私がこの句に接した時は違ったイメージを持った。それは人生において何か一本貫く捧の如きものを持ちたいものだという自分本位の希望的なイメージそして、何かの拍子にこの句を思いうかべるたびに、最初のイメージが不思議に甦るのである。

さて虚子の句を持ち出したのは、善導大師と法然上人の両者も「貫く捧の如きもの」で結ばれていると思うからである。それは人間はすべて凡人であり、その凡人のためにこそ阿弥陀仏の本願がある。だからわれわれは本願に順じて念仏すれば往生できるという確信である。そして、その確信は両者の三昧発得という体験により、より強固に裏づけされているのである。

今、ここでは人間は皆凡人であるということを中心に両者をみてみよう。

『観無量寿経』には上品上生から下品下生までの九種類の往生人のありさまが説かれている。この九品の往生

人を善導大師はすべて凡人であると言いつ切っている。それは大師以前の解釈にはみられないものであった。上品も下品も程度の差こそあれ、すべて凡人であるという、この大師の考えはどこから出てきたのであろうか。学問的にはいろいろな問題があるであらうが、私はこれをお大師のみずから反省する心から出たものと思う。大師の著書を拝読すると、念仏は当然のこととして、懺悔をさかんに勧めていることに気づく。『往生礼讃』には要・略・広の三懺悔が勧められている。要懺悔は十方の仏に自己の罪を懺悔し、略懺悔では無始以来、輪廻転生を繰り返して現在に至った自己の一切の罪を懺悔し、広懺悔では十方の仏のみでなく十方尽虚空の三宝、衆生に至るまでのすべてに向かって無始以来のあらゆる罪を懺悔するという。こうしてみると善導大師には自分が現在人間として存在すること自体、とりも直さず遠い過去世からの罪を背負っているのだという考えがあるようである。人は本来仏性をそなえている。仏になりうる可能性を持っている。このことは大乘仏教の理念であり、善導大師も充分にそれを承知していた。にもかかわらず、大師は、人は「現にこれ罪惡生死の凡夫」と言いつ切る。「本

来」は仏性をそなえているが、「現」には凡夫なのである。これは現実の自己を深く反省しなければ出てこない。しかも、それは決して観念的なものではない。広懺悔に述べられる三品懺悔をよむと、もともと真剣に懺悔した時には身体中の毛孔と眼から血が流出するという。中品の懺悔では身体中から熱汗が流れ眼から血が出るといふ。下品の懺悔とは身体が熱くなり眼から涙が流れるものだといふ。つまり仏の前に自己をさらけ出して反省する時に、真剣になればなるほど、現実の自己の背負っている煩惱にふるえおののくはずだといふのである。

このような現実の自己に対する姿勢は、深く自己を反省しなければ決して出てこないものであろう。そして、善導大師の宗教の偉大さは、そうした徹底した凡夫觀が阿彌陀仏の救いにつながるにある。それは有名な深心の解釈である信機信法にはっきりと示される。先ず信機で、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなし」と自己を認識する。これは懺悔の場合と同じである。そして信法で、このような現実の凡夫を救うために阿彌陀仏の本願があること、阿彌陀仏に対する絶対帰依の世界が開

かれるのである。

現実の自己を深く反省する点において善導大師と法然上人は全く一致する。法然上人の内省は自分が一般の仏道修行に耐えられない存在である、「われ戒定慧三学の器にあらず」という述懐に代表される。「智慧第一」と評された法然上人が仏道修行の基本である戒律一つもまれないというこの発言は、なみなみならぬ重みを持っている。周囲からは決してそうみえない。にもかかわらず「十惡の法然房」となげき「愚癡の法然房」と吐露する。こうした自己反省は何と善導大師と一致することであらうか。そして、このような求道遍歴の過程で法然上人は善導大師の著書にめぐり逢うのである。おそらくは念仏による凡夫住生の考えは法然上人の内部で発火点に達していたのであらう。善導大師がその考えに確信の火をともしたのである。

話は変わるが『往生要集』という地獄が先ず連想される。それほど地獄の描写の方で有名になった。地獄の苦しみは大変なもので、しかも、身体がずたずたになっても死ねないという。よみがえって再び苦しみを受けね

ばならない。まさに「地獄の苦しみ」である。こうした地獄は地獄絵になって人びとに伝えられた。人びとは地獄を恐れ、極楽往生を願った。このような地獄の恐怖から情緒的甘みのある極楽を願うという浄土信仰は、善導・法然の自己の内面をみつめ煩惱性の絶望から他力本願に帰するという信機信法の浄土信仰とはニュアンスが違ふようである。違ふようであるが両者は日本の民衆の信仰の中に混在してきたと思う。先年地獄をかなりリアルに描写した映画ができたそうである。ある若者にきいたところ「恐ろしいというより馬鹿馬鹿しい」気がしたそうである。だからといって現代人が「わが心の地獄」をみつめて信機信法に帰するとも言えない。さらに、もう一つ、御先祖と結びついた浄土信仰がある。死んだら亡き母に父にあえるというこの考え方は信機信法と決して矛盾するものではない。しかし、自己と御先祖があまりにも短絡してしまった場合は、阿弥陀さま不在の単なる御先祖信仰になる。口では簡単に信機信法というが、現実には問題が多いようである。こんな時、法然上人は何と答えるであらう。おそらく、にこにこして言われるであらう。「ただ一向に念仏すべし」と。

特 別 寄 稿



浄土への道しるべ

村 下 武 司
むら した たけ じ

(弁 護 士)

一

今から十五年程前の梅雨晴れの午後、法然上人讃仰会の集いが、東京駅ルビーホールで催されました。共生会の先達であり、弁護士の大先輩でもある故磯部常治先生に誘われてこの集いに参加したのが、私と『浄土』との出会いでした。それ以来讃仰会の集いでは、たくさんの方々と親しく知遇をいただき、貴重な御講話を拝聴し、生来愚昧怠慢な私を何かと御指導いただきました。

また、『浄土』を通じては、毎月毎号高僧の方々、専

門の学者或は篤信の方々からの語りかけを拝聴し、私もこれらの方々と声なき語らい合をした想い出がなつかしく思い出されます。ほんとうに「有難い」ことだと感謝せずにはいられません。『浄土』がこの度創刊四十五周年を迎えられるに際し、先ず今日までの「有難い」お導きを心から感謝申し上げると共に、『浄土』が今後益々発展し、私達だけでなく更に多くの人々に浄土への道しるべとして御活躍されんことを祈念する次第です。

二

最近鈴木大拙博士の『妙好人』（法蔵館出版）を読む機会がありました。この著には妙好人として、昭和七年八

十三歳で亡くなられた島根県瀬戸郡温泉津町字小浜という漁村に実在した一人の念仏信者浅原才市なる人の念仏行者としての言行を紹介しております。彼は体系的に仏教を学んだ人ではありません。然し、念仏を素直に信じ、聴聞し、法悦し、それを自らの心とし、生活したいたほんものの妙好人であったようです。彼の到達した宗教的な悟りは甚だ高いものであることは、彼の残した言行により証明され、彼の自由詩―鈴木博士は（吐出底 Utterances）とするのがよいと思うといっている。

―に書き残されております。その自由詩は、彼の信仰心が如何に純真で気高いものであるかが遺憾なく表現されております。そして、生活の一つ一つに念仏が生きて生きと充満し、躍動し、ほとばしり出ている念仏信者として彼の生きざまが強い感動をもって私に迫ってくるのを感じました。

私がここに鈴木博士の「妙好人」を取り上げたのは、実は妙好人の念仏生活の一々を紹介するつもりからではありません。このようなすばらしい彼の念仏信仰、信仰

生活がどのような場で、どのような過程を経て形成されたかということに深い関心があったからです。

二十歳前後の才市はバクチもやり、女遊びにも行く極く平凡な田舎町の青年であったようです。或る日バクチをやって巡査に捕り色々と訓戒されたそうです。そこで才市は「これではいかぬ。真人間にならなければ」と自覚し、お寺詣りをするようになったと彼自身が述懐しております。彼は下駄造りであった。毎朝必ず朝早く起きて近所にあるお寺安楽寺の朝の勤行に詣り、御住職と一緒に一心に読経し、念仏を称え、家に帰って、もう一度仏前の勤行を勤め、それから一生懸命下駄造りに精出す中にも「もぐもぐもぐ」と念仏三昧……をして、夕方には温泉のお湯に入ってから夕方勤行をする、といった毎日だったようです。時には、お賽銭を集めたり、御飯や料理造りの手伝いをしたりして法座の世話をやき、御住職と一緒に御仏飯をいただくのが最上の楽しみだったと自由詩に書き遺されております。このようなお寺詣り、それも全身全霊を傾倒できる御住職の導きにより、彼の念仏信者としての心が開かれ、育ぐくまれ、そして結実してものと思えます。彼がいかに安楽寺の御住職を

信じ、一心に傾倒していたかは、彼と親しく交流があり、その念仏生活を如実に知悉していた寺本慧達氏が「安楽寺の読経に遇い、説教を聞いて帰って行く彼の姿は、仏の智慧と慈悲の不思議な味わいに酔ったように喜び勇んで、愉しくて仕様がないうというふうであった」と語っておられること（楠恭記「寺本慧達を訪う」）から知ることが出来ます。

三

今日宗教の世俗化ということがしばしば論じられております。現代社会の都市化、核家族化、そして著しい科学の進歩の必然的な結果として、物質万能主義と利己主義が社会生活をぬりつぶした感があります。これが既成教団との関連において、お寺離れ、宗教の個人化の現象として捉えられ議論されているのが、いわゆる宗教の世俗化論かと思えます。よくいわれることですが、大学生の宗教に関するある調査では、宗教についての関心度がかなりあるにもかかわらず、組織された教団に対する反撥心はかなり強いとか、教団に所属しない人のパーセン

テージが七五%にも達している一方、宗教が大切だ、必要だと考える人が八〇%近くもいるということから、お寺離れ、或は宗教の個人化ということも成程と思われるわけです。少なくとも終戦時までには、先に述べた才市と安楽寺のように私達は家を中心としたお寺との結び付きがありました。先祖代々のお墓のある累代所属の菩提寺の檀家の一員として、信仰生活においても宗教儀式においても寺と緊密に結び付いていたのです。この寺檀制度、檀信徒関係は今日ではすっかり影が薄れてしまったのです。一口で言えば家付の宗教からの離脱でありましょう。寺檀制度の崩壊、家付きの宗教からの離脱ということは、憲法による宗教の自由の保障の結果であり、そのこと自体は評価さるべきでありましょう。然し、制度に拘束されない自由な個人までもがお寺との結び付きがなくなってしまうということは、真剣に考えなければならぬ大問題だと思います。都市生活者、特にマンションや団地居住者においては、人生における最も重要で厳粛な儀式である葬儀でさえ、葬儀社まかせというのが決して少なくないのが現状であります。ましてや才市のごとく気安く菩提寺で勤行をなし、お説教を聴くこと

は、今日では昔語りになろうとしております。

然し、その反面京都、奈良や鎌倉の寺院にはおびただしい数の観光客があふれ、毎年の元旦には各地の神社寺院に十万単位、いや多いところでは百万単位の初詣が押し寄せております。また団地ではお祭を再復元して、運動のシンボルにするものもあります。これらは単なる観光、群集心理或はリバイタリゼーションばかりではないと思います。私はこれ等は現代におけるいわゆる宗教現象の一つであると理解しております。然しこれらの現象は、人生を考え、解脱を求め、浄土を欣求する本来の宗教に根ざすものではありません。この世俗集団の形で、全く漠然とはあるが何か超越的なものを求める、いわゆる宗教的な現象を、本来の宗教に、信仰の世界にまで導き、高めることが出来ないものだろうか、と考えるのはけだし私一人ではないと思います。ところが、一般大衆は観光でお寺巡りはするが、もう一步先の宗教については積極的に求めることはしないし、浄土への道の入口がどこにあるのか、捜がそうとしないのが実情です。この大衆にわざと歩調を合わせているわけではないのでしようが、観光でお寺を訪ねても、建造物の解説

や、仏像の芸術的な観賞の手びきまでは世話をやいてくれるのですが、自分の健康や幸せを祈念する素朴な心にお寺側で手を取り心をそえて信仰への道しるべをして下さる方がいないようです。折角訪ねて来た観光客や初詣の参拝客に、もう一つの扉を広く開いていただき、「さあ、ここが浄土への入口ですよ」と信仰の庭に招じ入れていただけないものでしょうか。また、お寺の方々にも大いに街に出ていただきたいと思います。一般大衆への語りかけ、集会の持ち方にはそれぞれの工夫により色々な形、方法が考えられますが、要は街頭にも浄土への道の大きくて広い入口をしつらえていただく必要があるということです。そして、家付きの宗教から離脱し、お寺離れた多くの人々を再びお寺に呼び返し、やがては伝統的な深みがあり、三心四修のこもった浄土信仰へと導いていただきたいと思います。

八十年代は精神の時代であるとか、或は宗教の時代であると言われていますが、お寺離れをした一般大衆を先ずお寺に呼び返すことこそ、その第一歩であると考えております。そうでないと、求め迷える大衆はやがて怪獣に変じ同類相喰み、地球をも破壊してしまうのではない

かと気が気でならないのです。

四

『浄土』は創刊以来実に満四十五年の長い歳月の間、求め迷える私達と浄土との道しるべとしての役割を担ってきたわけです。そして、今日においてこそその役割に益々大きく期待されております。

『浄土』は昭和十七年頃までは一般書店や駅の売店でも広く販売されていたと聞いております。今こそその必要があると思います。今日の図書雑誌の複雑な流通機構の中で、一般書店等で販売するにはむずかしい問題もあるだろうと思いますが、創刊四十五周年を迎えるに当り、誰でも、何処でも、何時でも手することのできる『浄土』になっていただきたいと念願すること切なるものがある次第です。

(昭和五十五年六月十五日思いつくままに)

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『和 訳 善導 六時 礼 讃』

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 善導 観經 四 帖 疏』

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 法然 上人 選 択 集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 浄 土 三 部 經』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

取扱い 法 然 上 人 鑽 仰 会



旗と鍵

— アメリカ留学から帰って —

おお
みなみりゅうしやう
大南龍昇

(大正大学講師)

外国生活を経験した人には、大体、三つのタイプがあるという。第一は、生活した国にすっかりなじみ、そここんほれ込んでしまうタイプ。第二は、逆に、その国が嫌いになって、いわば国粹的になってしまうタイプ。第三は、国籍不明になってしまうタイプ、だそうである。

もちろん、その国にどの位の長さ生活したかによって、人さまさまだろうと思う。私の場合は、外から日本を省みる機会にめぐまれ、改めて日本の良さや欠点が認識されたということ。また、わずかな期間（といっても、二年間だから、長いといえば長いのだが）のアメリカ滞在ではあるが、この国の良い面も悪い面も、多少知ることができた。しかも、なんだかんだいいながらも、この茫洋として、なんとも、つかみどころのない、それでいてパイタ

リティに溢れた国に生活したということ、なんともいえない深い愛着が湧き、事に触れ、折に触れて、この国をなつかしく思いやるのである。

帰国して、早や三ヶ月経つ。新聞を読んでもテレビを見ていても、アメリカのニュースは、なにかと気になるものである。なにも、私がアメリカに特別強い関心をもっているからというのではなくて、実際、外国のニュースの中では、アメリカのニュースが一番多いようである。それだけ、日本がアメリカと緊密な関係をもっているということのあかしでもあろう。ただ、アメリカで見た聞いた範囲では、日本人がアメリカのニュースを取りあげるほどに、アメリカ人は日本のさまさまな面にわたって関心をもっているという訳ではない。むしろ、マスコ

ミの日本に関する報道は少ないといつてよいのである。

アメリカ人は、ことのほか、国旗つまり星条旗が好きである。事に触れて旗を掲げる。郵便局などのお役所に、平日、国旗が掲揚されているのは、もちろんだが、極く普通の商社とみうけられるビルにも、なぜかしらないが一年中、旗を出しているところがある。小学校では、毎朝、各教室に掲揚された星条旗に向つて、「米国のために……アメリカ国民として……」といった内容の宣誓をするというし、ちょっとした公的な集会では、決つてはじめに、国旗に誓いの言葉をあげるといふ。ニューヨークのマンハッタンにある真宗寺院「アメリカン・ブッデイスト・チャーチ」は、毎年七月に盆ダンスをハドソン川近くのリバーサイド公園で催すが、この行事は、近辺の多くのニューヨーク市民に大変人気がある。盆踊りが始まる前には、ちゃんと仏式のセレモニーがあつて、まず日米両国国旗の入場と国歌の合唱に始まる。そのあとお盆についての説法があつて、いよいよハドソン川の彼方に沈む夕陽を背に、盆踊りの大きな輪が二重、三重にひろがるのである。

アメリカは人種のるつぽといわれる。ことに「ニューヨークは、アメリカではなくて世界だ」といわれるように、アメリカという国を象徴する、代表的な国際都市である。このような多民族の寄せ集まりの国であるから、アメリカ人にとっての最大公約数は、星条旗だということになる。国旗を掲げ、それに向つて宣誓することは、自分がアメリカ国民なのだということを確認することであり、多民族のさまざまな考え方を統一するという効果をも合せてもっているのである。彼らが国旗をあげるのは、単に好きとか嫌いというのではなく、幼ない時からの教育に培われた国家への忠誠とか愛国心によつているのであらう。

アメリカ二百年の歴史で、このまともにくい世論が、完全に統一されたのは、日本海軍による真珠湾攻撃の時で、この時ほど、日本との戦いに勝とうという目的のもとに、国論が結集されたことはなかったという。またベトナム戦争では、世論は、真二つに分かれ、結局、アメリカは史上初の敗戦をベトナムで経験したのであるが、世論が二つに分かれて戦わされるということも、いかに民主主義の国、アメリカらしいといえる。世論

が統一されることも、あるいは戦争を支持し、反対する自由があることも、結局は、国家への愛着心、忠誠心が、民主主義を土台にして、常に養われているからにはほかならない。

翻って日本はどうだろうか。戦前のことは問わない。

日本人は、これほどに誇りをもって日章旗を掲げているだろうか。

私が帰国したのは三月であったが、五月というのは、メーデー、憲法記念日、子供の日と一年中で最も旗日の多い月である。五月三日の憲法記念日に、ラジオのある番組で、戦争放棄を唱えた憲法第九条を自衛隊員に読ませたら、どんな反応を示すかと、放送局が仕立てた国旗のセールスマンが家々を訪ねて、どの位売れるかということを実験する番組があった。この時、ほとんどの自衛隊員（一、二の人は読んだが）が戸迷いを見て、ある者は拒否し、逃げ出してしまった。この番組を聞いていた多くの人は、自衛隊がおかれているみじめというか、複雑な立場について改めて考えさせられたのではなかろうか。それにしても、自分の仕事に対して、かくも自信も誇りも持たずに従事してよいものであろうか。事は国を

守るといふ重大な任務であるのに。

国旗のセールスに至っては、てんで相手にされない。「そんなものいらぬわよ」の一言で、セールスマンはすくすくもはや国旗などは無用の代物なのであろう。

私は幼い時に父に教育されたせいでもあるだろうか、多分に習慣的ではあるが、祝日には欠かさず旗を掲揚している。世界中の、たくさん国旗の中で、これほど、シンブルで美しい旗はないと思い、その創案者に感心さえする。渡米する二年前は、私の町にも、もう少し祝日に旗を出した家があったように記憶しているが、帰国した今は、ほとんど見かけることができない。家の者にいわせると「町では家だけよ」という。もう国旗などに関心がなくなってしまったのであろうか。

日本は、単一民族国家なのだから、よくまとまってい、アメリカのように旗を掲げて、アメリカ国民であることをいちいち自覚させる必要などないのだといえ、それまでのことである。ところで、日本人はどういう時に、自分が日本人だと自覚するのだろうか。恐らく、大相撲の千秋楽をむかえた時ではなく、オリンピックで日の丸が揚った時ではないだろうか。つまり、世界の中心

の日本」ということに目覚めた時に。

ニューヨーク生活のはじめの三カ月を、私はアメリカン・ブッデスト・チャーチに寄宿させていただいた。この御住職は、本年度の仏教伝道教会賞を受けられた関法善師である。ニューヨークを訪れ、関師のお世話になった人は多い。チャーチを最初に訪ねた日、私は関師から、「ニューヨークでは、犬の糞を踏まないように気をつけることと、部屋に鍵を掛け忘れないよう注意することですよ」と教えられた。実際、多くのニューヨーク市民がいろいろな種類の犬を飼っているのは驚ろかされる。ここには、犬のフアッションから犬の教育施設まであって、一種の犬の文化があるようだ。そのお犬様の糞が、おびただしく路上に放置されている。だから、街を歩く時は、向うからやってくる黒人やブエルトリコ人にガンやナイフをつきつけられるのを用心しなければならぬのと同じ位、足元の犬の糞に気を配らなければならないのである。

若者がジーンズの腰の部分に、二十も三十もの鍵たばを通したキイホルダーをぶらさげて歩いている光景をよく見かける。車にしても、部屋にしても、小さな引き出

し一つにも鍵がかかるようになっていた。もっとも、これは日本も同じだが、日本では、すべての引き出しにまで、徹底して鍵をかける人は少ないだろう。しかし、ニューヨークでは実際、鍵をかけなければ無用心なのだから、自然と鍵の数も多くなるのである。

ところで、鍵は、いわば個人の自由を守ることの象徴といってもよい。民主主義というのは、自由とか平等とか権利義務を尊重することであるが、その根本は、個人の尊厳性をおたがい認め合うことにある。そこから、よい意味の個人主義というものが生まれてくるのであろう。つまり、自分の個性や主張を大切にすると同時に、他人のそれをも尊重するということである。アメリカ人に限らず、西欧人の場合は、人間の物に対する見方、感じ方は、人それぞれ違うのだから、各人の意見は、当然異なるものだということから出発する。したがって、おたがい理解し合うためには、徹底的に議論を重ね、ある面では、相手をやつつけて、自分の主張を通すという習慣がある。これに対して、日本人の場合には、一つの民族社会の中で育ち、生活しているから、どんなに考え方、意見が違っていても、どこかでは、一つ

にまとまる、通じ合うことが出来るはずだという前提に立っている。日本の文化を「察する文化」と呼ぶ由縁であらう。もっとも、昨今の日本には、西洋産のイデオロギーという厄介な代物が入ってきて、それにひきづり廻

されているから、日本も、変に欧米並みになってきているのではあるが。いずれにせよ、まやかしてない、本物の個人主義とか人間尊重というものが育たなければと思うのである。

表紙のことば

「芋　　タ　　立」

土屋 正 男

黒い雲が空いちめんに拡がった。すこし涼しい風がふいていたと思ったけれどツイ遊びすごしてしまった。

家へ帰りつくまで降らねばよいがと思うまにポツリポツリと大粒の雨が……。

突然目の前に金光が閃めいたと同時に突拍子もないものすごい雷が腹の底までゆさぶって思わず地べたへ這いつくばってしまった。

芋の葉は風にあふられて身をもむようにもがいている。

「くわばらくわばら」お経のように夢中で唱えている間も雨や風はつのつて一時は活きた心地もしなかった。心の中では真剣に「もっと早く帰って勉強していればよかった。そしてたらこんな罰も受けなかったに」とさかんに悔やまれた。

篠つく雨が納まってやれやれと濡れ風になった体を起して無事に過ぎ去った雨雲の跡を追っていた目にやがて大きな虹をみた。怖かった小さい頃の思い出です。

信仰への道



仇を拝まれた法然さま

尾田秀童
おだ しゅう どう

毎年四月には総本山知恩院をはじめとする浄土宗の寺々においては、親しく御忌（法然忌）の御法要が勤められるわけです。年に一度の御忌は、私が収容されています福岡拘置所の教誨堂に於きましても、浄土宗の諸先生方がお出でになり、死刑囚のみんなが集まって如法にまとめられ、法然上人を最も身近に感じ得るひとときでもあります。

法然上人のみ教えやそのお徳の数かずについては、日頃浄土宗の僧正で教誨師の一田善寿先生、ならびに他の諸先生方より拝聴し、全死刑囚ともども念仏を称えつつ安心の日暮らしをさせていただいております。

私事でまことに恐縮ですが、私は昭和四十一年十二月福岡市内で発生したいわゆる「〇〇事件」に関与したか

どで、捜査当局の訴追を受ける身となり、強盗殺人、同未遂、放火の罪名のもとに福岡地方裁判所において死刑の判決を受けました。この判決は昭和四十五年十二月に確定し、爾来私は確定死刑囚として日々を送っているのです。

さて私に対する裁判が正しいかどうかは別として、教誨で法然上人と出会ったことにより、私の人生観、社会観、宗教観は一変しました。「法然さまは父の仇を拝まれたのですよ」と私が死刑囚となり、はじめて受けた浄土宗の教誨で一田先生はこう申されました。

“仇を拝む”

にわかには理解し難い先生のお言葉です。しかし御法話が進むにつれて、私の疑問は解け、法然上人のお人柄と

み教に心惹かれるようになったのです。

法然上人の偉業を語るには、まず上人の生い立ちから語らねばなりません。

上人は長承二年（一一三三）四月七日に現在の岡山県久米郡の押領使（治安維持にあたる豪族）漆間時国を父として、その奥方秦氏（はた）を母として出生し、幼名を勢至丸と申しました。勢至丸は幼少にもかかわらず、学問に武道に非凡な才能を持ち、やがては父のあとを継いで地域を治める筈でした。

ところが勢至丸が九歳のとき屋敷に夜討がかけられ、反撃空しく父は深傷を負ってしまったのです。余命いくばくもないと悟った時国は勢至丸と妻秦氏、そして重臣を招き遺言するのです。

「めぐりめぐって止ることのない怨念を離れ憎しみを越えて人間の尊さを育てて行く大きな道を求めよ、それが親への何よりの孝養であり供養である」

と、当然仇討をすべきものと信じていた勢至丸にとつて、父の遺言は意外であり、反面心を動かす説得力をも兼ね備えていたのです。仇は仇を呼ぶ、世々代々続くであろう仇討合戦をおもんばかる父の遺言に、勢至丸はい

つしか剣を数珠にかえて仏道修行に旅立つ決意を固めるのでした。武士の身分を捨て、それは大変勇気の要ることです。こうして比叡山に登った勢至丸は、寝食を忘れて勉学に励み、その行が高僧方に認められ、十八歳の時、法然房源空と名乗り、それ以後の法然上人の勉学は驚くばかりで、遂には時の高僧や学者達に法然房の主張は正論であると言わせました。

「善人も悪人も等しく念仏を申すことに依り往生することが出来る」

と法然上人のみ教は一言で言えばこの通りですが、時の権力者は、このような正論がまかり通ったのでは、政治がやりにくくなり全国民に対して念仏禁止令を布告したのです。しかし念仏のみ教は広まるばかりで禁止令の効果は全くなく、やがて上人とその弟子達の追放、流刑へと発展しました。

法然上人は善導大師の影響を強くお受けになり念仏の道を深く求められました。壮年期の法然上人を「智恵第一の法然房」と呼んでいた高僧方も多かったと言い伝えられています。

しかしながら上人が学ばれ書き残された何百巻にも及

ぶ御書物は結局「一枚起請文」に集約されるのです。

「一枚起請文」には、

「智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず、学問をして念のころを悟りて申す念仏にもあらず」

と、すなわち念仏は、無条件に受け容れて、はじめて仏恩の利益にあずかるのであって、別に念仏学者になる必要はないと申されているのです。そして往生極楽の要因として申されるに、

「智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし。

浄土宗の安心起行この一紙に至極せり」

と明確に申されていますから、念仏のおはたらきを疑う必要など全くないのであります。

法然上人の出家の動機は、確かに父君の遺言に従うところが大有りました。だが前述のように、上人の「一枚起請文」に集約されている真髓に触れますときに、やはり平等施一切のみ教に一貫性が存在します。

そこには父君の仇を憎悪する姿など微塵も見当たりません。かえって法然上人が仏縁に遭うことが出来たのは、父の仇がそうさせたのです。憎き仇を善知識として、これを拝む。なんとみ心の寛い法然上人ではありま

せんか。

毎日の新聞紙上を見ますと、必らず痛ましい交通事故で人が亡くなっています。公害や犯罪もまた然りです。

こうした問題は将来補償の面で、加害者対被害者に対し、血みどろの訴訟に発展することは必至です。

法然上人が仇を善知識として拝まれたように、今の世でも加害者は被害者を拝み、被害者もまた加害者を拝むことが出来たならば、この世が極楽浄土になることと思えます。世界も真の平和になるでしょう。

死刑囚の私が被害を拜んで懺悔しなければならぬのは勿論ですが、私を死刑囚にした検察官、裁判官をも善知識として拝める身の上になりたいものです。

御忌にあたり「仇を拝まれた法然さま」と題して私の所感を記させていただきました。

死刑囚より父と親われておられます一田先生は俳号を牛畝と言われますが、昭和四十六年より俳句の指導をうけています。牛畝先生は昭和五十二年秋に赤坂御苑の園遊会に両陛下より招かれ、陛下よりお言葉を受けられ、

「死刑囚の教誨は如何ですか」と聞かれた時に、

「死刑囚が人を殺した手を合せ、念仏称えつつ立派な

俳句を残して死んで行ってくれます」

と申されたことが週刊紙等に掲載され、感激いたしました。
私も先生の指導により、

書き初めに六字名号強く書く

秀童

三ヶ月死囚安堵のお念仏

〃

死囚囚先づ念仏し事始

〃

初夢や浄土に遊ぶ死囚囚

〃

念仏して厄を払ふや死囚我

〃

と新しい年を迎えますと、教誨堂の阿弥陀如来様にぬ
かつきお念仏を申し、

み仏の慈悲につつまれ寒に堪ゆ

秀童

念仏を申せば心暖かく

〃

念仏に生きる倅寒の獄

〃

御忌、施餓鬼、十夜が年中行事として、教誨師の浄土
宗の先生が四人来られ、沢山お供物を提げて、厳肅に法
要がつとめられます。特に御忌は法然上人への報恩のた
めの大切な法要で、

死囚囚仏具磨いて法然忌

秀童

獄の御忌指導課長も木魚打つ

〃

念仏して木魚を打てば御忌らしく

〃

祖師の額祭りて御忌の会座親し

御供物を山と飾りて獄の御忌

御忌法話聴けば仇も善知識

御忌僧に和し念仏の死囚囚

正業は念仏唱ふこと法然忌

死囚の身忘れ念仏の死囚囚

花祭は、みんなが童心に帰えった思いで、

死囚囚巧みに葺きし花御堂

秀童

盆は先立ちし死囚囚に對して、

僧死囚看守一堂盂蘭盆会

秀童

また特に十夜法座は、逝きし死囚囚に諷誦文の回向が

あげられ、

父母のもと逝きし死囚囚の初十夜

秀童

先亡の死囚囚へ念仏十夜かな

〃

お浄土へ生れし囚へ十夜諷誦

〃

十夜僧より戒名死囚囚に

〃

そして、十夜法要の時には浄土に生れています私まで
聞えるように鉦をたたいて迎へて下さるようお願い申
しあげ、死んで行った死囚囚のために、後に残った私達
は、声高らかに念仏して菩提を弔うのであります。

浄土句集

一田牛畝選

ながながと法話楽しき善導忌 東京 新井 新生

玄関に一筆添へて蔵餅わらひ

東京 阪入 等達

評 天拝山の近くに棲んでいて、其の近くに藤まつりの武蔵寺の薬師仏に香煙が。

祭とて香煙たえず藤の寺

福岡 安藤平二郎

仁王門埋めつくして露園つと燃ゆ

福岡 高良 慈風

評 法話があまり長くなると眠気がさすが、余程話上手らしい。しかし唐の善導大師の話となれば、中国ブームの現今だから興味を持ち、みんなを喜ばしてくる。

評 古里の土産に蔵餅を持って来たが留守らしいので一筆書いて早目に召せよと。

甘茶たく百年前の大釜で

京都 安藤 寛

柳絮舞う古城逆さに映す濠

東京 細田 初枝

鶯に早き目覚めの京の坊

福岡 原 敬二郎

修験者も夏炉を焚ける羽黒山 福岡 荒牧 還愚

評 濠のまわりの岸には柳並木が、そして古城が其の濠に逆さにうっている。

楠若葉寺苑明るき善導寺

福岡 上滝津弥音

評 作者は芭蕉翁の跡を追ふて、みちのくの旅を五月初旬に私と共にした。残雪の羽黒山に、夏炉を焚いている修験と同居したのである。

浜名湖の縮緬波や春の風

東京 真野 竜

芹摘めば手元の水の濁りけり

東京 真野よし子

評 広々とした湖に春の風が、そして波は高からず縮緬波とは如何にも長閑だ。

雨音に春の眠りの深まりぬ

東京 阪入志津枝

東京 吉原登起子
春うらら渡良瀬川に子等遊ぶ

福岡 服部 光代
花蘇枋昔ながらの堀つつく

東京 鈴木 葉子
渡良瀬の川面をわたる風光る

東京 田中 秀代
囀や心弾ませ旅仕度

福岡 三牧 重利
藤棚の下の野点の娘の美し

東京 末常てる子
深大寺門前低き枝垂梅

東京 小笠原香祥
豊かなる心の糧や善導忌

福岡 稻永 新
どんたくの囃につられ外人も

東京 須藤 政雄
春の日に映えて彼岸の遠江

山形 松田 光誉
棟上げも祝言もすみ花見酒

三重 森 静枝
詠唱も習って待てる法然忌

東京 原口 敬子
芽ふきたる街の柳に風軽く

山形 松田 允子
笛太鼓先だて神輿花曇

三重 山田 うた
白藤に夕闇せまる寺の庭

山口 上野 明達
五月晴三々五々に参道ゆく

東京 吉田ゆきあ
花曇稲兎の笑顔や善導忌

群馬 島津 か寿
楡山の若葉がくれに松の幹

東京 松濤 敏江
若やぎて姑の坐れる御忌の会座

埼玉 佐久間愛子
御忌詣で早や葉桜の増上寺

山口 三井 寛静
燈明のまたたき亡母の石路の味

大分 丹羽 難中
橋よりの見下す藤のよきながめ

福岡 高良 幸代
陽を刎ねて藤の白さの眩しかり

東京 栗原やえ子
道風の蛙の史話や春柳

一田 牛畝
滝あれば不動を祀り札所とし

一つの道(一)

—わが教え子のこと—



戸川 霊俊
（京都市・黒谷西住院住職）

（京都市・黒谷西住院住職）

乙女子たちには、哲学という学問はむずかしいらしいし、むずかしいというよりも、初めからこういう学問を学ばさせられる自分たちの立場に疑問をもっているようだ。

「先生、哲学をわかり易く話して下さい」——わかり易く、講義することの方が、難かしいのだよ——そう答えながら、ここ数年、旧友である大谷派の僧籍にある学長に乞われて、若い女性に語りかける私である。

さる学年——。京都学派を紹介しながら、西田哲学と禅のかかわり合いを、そして自分の若き日の貧しいなが

らの禅への体験を述べたとき、心惹かれるものがあつたのであろう、一人の学生から講義時間の終りに声をかけられる。「禅に入りたい。適当な方法を教えてほしい」と。彼女多田悦子と呼ぶ。

私は、自分が年来私淑申し上げている南禅寺塔頭慈氏院のご住職で、僧堂師家である柴山全慶老師（のち南禅寺派管長になられる）におたづねした。

——毎月第一日曜の胡禅会がいいだろう。よそ様では、近頃、禅をわかり易くとか、禅の大衆化とか云われるが、当方は、禅の安売りはしない。むづかしければむ

つかしいで、道を求める者が、先づ自らを高めてきて、こちらにまで近づくべきである。

僧堂の提唱に参加させてほしいという者もあるが、対象はどこ迄も雲水本位である。雲水の妨げにならぬなら、そつと来て、邪魔せぬように傍聴されてもよろしい。しかし、今はまづ胡禅会に来られるが宜しいだろう——と語られると温容温顔の老師は、その様な厳しい一面の方があった。

胡禅会は、朝八時に開かれ、座禅一時間、講義一時間。世の寺の法話の集いといえ、老人が殆んどであるが、ここは百人を超える、しかも若い人達の参加が多いのであり、京都にも有数の禅会である。彼女は欠かさず参加した。

夏休みには青年大衆を対象に早朝の禅座が開かれる。朝六時からの参禅には、彼女の住所枚方から一番の私鉄に乗っても東山山麓の南禅寺にはかつかつ六時半にしか間に合わない。

そこで、「台所の板の間でも、どこでも、よろしいから泊らせて下さい」という彼女の懇情を容れて、私の自坊に前夜から泊めてあげる。

大学を卒へると衛星都市の職員に就職した彼女であるが、有給休暇を利用して禅への求道はつづけられた。

柴山全慶老師がアメリカ御巡錫中、或はご長養中は、いまの管長勝平宗徹老師のご提撕と受けたようである。

——自分は母たちの迎ったみちを繰り返えしたくない。人並の女のように結婚して、子を産んで、育児、家事の断ち切ることのない、くり返への人生はもうしたくない。自分一個を確立したい——いつか私に告げてくれた気持から、周囲からもたらされる縁談にも耳を借そうとしなかった。

朝日奈宗源老師在世中の鎌倉円覚寺に、そして暫らく彼女からのたよりが途絶えたと思うと、厳冬積雪幾丈の北越永平寺に道元禅と求めての彼女の求道の旅は文字通り畢命を期としてであった。

時候の佳い季節には永平寺を訪れる人も多からう。すでに参拝客の遠のいた真冬に女性の身で、而かも何度も参籠を峻拒されながら漸くその日必死の切願が容れられる。

禅の体験——宗教経験というものは、他者に説明できるものでないし、また語るべきものではない。どこまで

も不立文字であろう。私も敢て彼女から、求めてそれを聞こうともしない。強いて知ろうと思へば、ただ、ほかに彼女の平常の言葉の中から感じとるしかない。

——先生、一ばん辛かったのは、毎朝、雪を降んで、庫院に朝の粥飯を頂戴にゆくときです。ひもじいお腹で、ずっと容器をもちながら待つ間の時です——その時間の長く感じられること。寒さつめたさなんか些さかも苦になりません。

彼女のように、参籠を許るされた者は七・八名あったらしく、中で女性には彼女ひとりであった。

かつて読んだものの中に、永平寺は紅葉が済むともう冬で、翌年の五月頃までは大伽藍が檐下まですっぽりと積雪に埋もれる。雪が融けかける参拝の団体がちらほら上山してくるころになると、半年近くの間雪の中に沈んでいた伽藍は蘇り、外部から隔絶している修業の掛塔僧達の胸には、やっと春が訪れるの实感しきりであると書かれていたのを記憶しているが、その人界を途絶した厳冬の永平寺に彼女は身も心も沈め静めていたのである。帰って来ると日々の生活の空しさがひとしと感じられる。仏教を深く究めたいとの気持が湧然とわいてくる。

人づてに知った京都の仏教大学の通信教育の仏教学科を受けることとなる。

真夏のスクーリングに、毎日枚方から通学するよりはと、大学の紹介で、大学契約の宿寮として西陣に在る日蓮宗の大本山妙顕寺に止宿することとなる。

大本山妙顕寺は京洛日蓮門下十六本山の中でも南朝後醍醐天皇勅願以来の屈指の名刹である。止宿中のスクーリングの学生、数十名、その中で、毎朝五時半の晨朝勤行に参じる者は一割にも満たない。その僅かな参加者の中に彼女はあった。

南法妙法蓮華経——この唱題題目が彼女の求道の胸を一閃ピカリと貫ぬいた。勤行のあとの貫首貌下の法華経の真髓の法話。

「これだ。私の求めていたものは——」

この刹那が彼女の回心の経験とでもいうべきであろうか。

——私は、禅を捨てたのでない。私の禅はここで生きたのです。法華経によりてこそ禅は生かされたのです。日蓮大聖人の教えは、また禅によってこそ生きるのです——後日、彼女は私に、こう告白している。

スクーリングが終ってから、貫首猊下の許しを得て彼女は毎週土曜、役所がひけると京都に急ぎ、寺に泊まり、翌日の晨朝勤行に参加して唱題題目につとめ、人手の乏しい寺のために終日、清掃来客の応待に奉仕し、枚方の家に帰る生活がつづけられた。

その頃、すでに彼女の心には、俗から聖へ、きっぱり俗縁を断ち切って出家得度への決意が固められた。役所も辞めた。あとは、ひたすら妙顯寺を訪うと、法華経誦に渾身するばかりであった。

「若い乙女の一時の感情が出家を志すのでないか。よくよく考えるように」何度貫首猊下から繰返へしさとされたかわからない。

それなら両親や一族の同意は？ 勿論、同意の得られよう筈がない。でも彼女は一時の親不孝であるよりも大孝に生きる為に必死に口説き懇願した。たった一人の娘——彼女には兄が一人ある——のやがて近づく婚礼の晴れ姿を夢に画く両親としては堪えられぬ思いであったろう。

彼女の固い決意に半ば諦めた父母に送られて、彼女は大本山の妙顯寺に入門する。

——先生は、私の出家に責任があります。先生との出会いがなかったら、私の出家得度はなかったでしょう。是非得度式には出て下さい——

私のなまかじりの講義の中の禅の話が、彼女の素晴らしい出家得度のきっかけとなっていることに大きな責任を感じさせられる。私は日蓮宗の法衣屋さんに頼んで、新発意の尼僧の居士衣をこしらえてもらい、これを彼女の新しい出発への祝いとした。

十二月八日釈尊成道のこの日が彼女得度の式日に選ばれる。その日の洛北西陣の空は、北山おろしに一人の寒土を感じさせられた。

暖房の設備とて無い古い広い本堂である。しかしひとり、のうら若い女人が、いま仏弟子となって、仏道へ踏み出そうとするこの場の雰囲気には、一種凜平とした冬敵清冽の気配が漂う。

きのうまでのファッショナブルなお嬢さん姿は微塵も無く失せて、授戒の師の前に膝まづく剃髪白衣の若き尼僧の姿に、仏道精進へのただただひたむきなその心根への感激に、私自身までもひきしまる思いにひたされたのである。

藤長けた貫首沖鳳亀老親下と新しく誕生した妙鳳日香尼、いまにその対座の印象は強烈である。

あとの書院での祝宴の席で、彼女のお母さんが私の盃に注ぎにこられたとき、私は「さき程からずっとあなたの嗚咽の声を聞いていましたが、あれは最愛の娘を尼にした喜びの涙ですか、それとも悲しみの声なのですか」と問いかけた。皮肉でも、たしなめでもない私のこの間に、お母さんは涙をぬぐいながら「よっくわかってるのですけれど……」と声を落とされた。

「あなたが悲しむことは、彼女の喜びごとには不吉ですよ。あなたの娘さんと日蓮大聖人様との素晴らしい婚儀ですよ。妙鳳さんはもうあなたの娘ではない。あなたより一段高く、あなたをこれから導いてくれる方ですよ」私の言葉がわかったのか、お母さんは領いてくれた。

——今日は多田悦子さんのお通夜ではありませんよ。彼女の素晴らしいおめでたの日。大いに祝盃を挙げて下さい。歌ってあげて下さい——司会の山田一光執事長に促がされてようやく座は華やいできたが、それとともにまた世の結婚披露の宴とは勝手の異なるのは、友人多田

悦子の花嫁姿を期待していた同僚、学友にはやむを得ないことであらう。

去年は身延山久遠寺での信行道場も成業という。涙の中に得度を祝ってくれた母も、孫娘が普通の娘らしく、嫁入ってゆくその花嫁姿を夢にも希い求めていた祖母も、つづいて世を去った。いま日々の大本山妙顯寺の精進生活がつづけられている。

藪内好禅老尼師がこのことを知られて、褒め讃えながら——後継に悩む本宗であった——と微笑ましく怨じられたが、私は心の中で——浄土宗の私から臨済宗南禅寺の柴山老師へ、それから円覚寺の老師へ、曹洞宗永平寺の老師、浄土宗立の仏教大学、そして日蓮宗妙顯寺の沖老貫首から妙鳳尼への不思議な一筋の縁にたつらなる仏道です。一味同乳の仏道は一つ——と、お答えしたのであった。

(つづく)

新会員のご紹介を広くお願い申し上げます。お知り合いの人やお檀家の皆様に呼びかけて、一人でも多くの読者をご勧誘下されますれば、幸いです。

法然上人讃仰会



念佛ひじり三国志

(五)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

木工——番匠と呼んだらしい。現代でいう「大工」とは少し異なるようだ。木工作業の設計、監督を司る。いわゆる大工は、ただしの手伝い、助っ人である。

禅勝房の前身は不詳である。「四条万里ノ小路ニアリケルガ……」と隆寛律師の法然上人秘伝には書いてある。

隆寛は栗田関白道兼の末で父は小納言資隆だった。叔父に法然の天台学の師である皇円阿闍梨がいる。

禅勝房に関してはその秘伝でエピソードをくわしく紹介し、後年隆寛自身が嘉禄の法難で東国へ流されてゆく

途次、遠江で涙の再会を遂げた。よほど親密な仲だったのあらう。したがって四条万里ノ小路ニアリケルはそこらあたりに住む貴族の子弟、と考えていい。若くして出家、年ごろになって妻帯を熱望するところなど如何にも貴族出身の僧らしい。

その妻帯だが、清水へ参籠していて観世音菩薩が夢に現れてお告げがあった。

「明日の結願で下山するとき、石橋で最初に出会った女性を妻とするがよい。その女性こそお前が望んでいる人だ」

禅勝房が翌日、観音堂を出て石橋の袂まで来ると前方

<観音菩薩の夢告>



前号のあらすじ

建永元年(一二〇六)十二月、法然上人の門下安樂、住蓮の二人の専修教団の若いリーダーが、鹿ヶ谷において六時礼讃念仏を修した。後鳥羽院はこの時、突然の熊野行幸中であつたが、その留守中に松虫、鈴虫という二人の小御所の女房がこの法会に参列し、感動のあまり剃髪出家してしまつた。このことが後鳥羽院の勘気を買つて、安樂、住蓮は斬首刑に処せられ、専修念仏の禁止令が出されることになる。いわゆる建永の法難である。しかしこの事件に関しては、藤原定家の『明月記』などのわずかな史料の記述から調査しても、まことに不可解である。「承久ノ変」の首謀者三浦秀能や、尊長法師が、後鳥羽院のまわりで画策していたことは充分に考えられる。「鈴虫松虫事件」という歴史の悲劇の裏にあったものは、一体どのような企みであつたのだろう。

から下女を連れた十七、八の美女がやってくる。禪勝房は呼び止めて、夢吉のことを語った。すると女人は玉のような手をさしのべ禪勝房の袖をとらえながら言った。「妾もこの両三年来、良縁を求めてこのお寺へ日参してきました。昨夕、お告げがあつてこの刻限、石橋の袂でゆき遇つた男性、誰であろうと法師であろうと夫ときめなさい、と言われたのです」

「それでは私と全く同じ夢告ではありませんか」

「貴郎こそ妾が長年待ち望んできた君でいらっしやいます」

二人は石橋の袂に小半刻ばかりたたずんでお互いの過去や身分、未来への考え方を打ち明けた。まさしく意気投合だった。

「これからすぐに貴女のお住居へゆかねばいけないのですが、私は未だ結願の御礼をしております。今宵ばかりは願書を捧呈して、もうひと晩お籠りをしなければなりません。明朝は必ず参上致します。どこにお住まいか、おっしゃって下さい」

女人はがっくりきた様子で、

「今宵ご一緒できないのですか。妾は一条今出川の南に住んでおります。お待しています。明日はどうぞお間違いない」

と自宅へのくわしい道順を告げた。男の方をふりかえりつつ清水坂を下っていった。

お礼の参籠をした禅勝房は氣もそぞろだった。女人の顔ばかりを思いうかべている。いつもだと礼拝三百数十回、心経三十三巻は読誦するのだが、何もしないでぼんやりと過ごしてしまった。

夜明けを待ちかねて観音堂を出ると石橋を駆けおりて、一条今出川へ急いだ。指定された邸内へはいると、昨日女人に随待していた下女が現れ声をあげて泣きぐずれた。やがて年配の女性が出てきて事情を語った。

昨日大悦びで帰宅した娘。夜陰から俄かに身体の変調を訴え、手当の甲斐もなくそのまま息を引きとったという。禅勝房を邸内へ導き入れた。

昨日の美女が今朝はもう両眼を閉じてムクロと化している。年配の女性は手漬をひらき、娘の辞世を禅勝房に示した。

——契リヲキン人モヤ尋ネ問イクルト今夜バカリノ命ヲモカナ、ト書キ付ケテソノ下ニ二九也ト書カレタリ。サテコソ御年八十八ハ知ラレケリ。

「法然上人秘伝」は書く。格別に意味のある辞世ではないが、二九也ト書カレタリ、サテコソ御年八十八……という文章に注目しておきたい。二九の十八。いわゆる「九九」をもじったのだが、すでにこのころ「九九」が流通していたことを物語る。

このころとはいつか。「秘伝」の作者は隆寛律師とい

うことになっているが、内容から判断して別人らしい。隆寛没後その遺弟の誰かが書いたのであろう。それにしても鎌倉初期である。

「九九」が流通しはじめたのは、十八歳をあえて二九とシヤれたあたりからもうかがえる。

イロハニホヘトよりもアイウエオの五十音図の方が古いように、算術の「九九」もこんな昔から流通していた事実を思い知るべきだ。

なぜこんな雑学的なことを紹介しておくのか。それは、われわれが歴史を回顧する折ともするとおごった差別観で臨むあやまちをししば犯しているからである。現代は物質文明において急速な進歩開発を遂げているが、精神文明となるとどれほどの時差があるか疑問が生じてくる。まして、宗教の分野でどれだけの発展があったであろうか。

となると、古くからの伝承や説話を軽んじたり無視してはならなくなる。

閑話休題。「法然上人秘伝」における禅勝房の悲恋物語の結末を見ることにする。秘伝はこんな文章で結んでいる。

——サテ御庵室へハ参リテ候ナリト泣ク泣ク泣クバカリ申セバ、上人是ヲ聞コシ召シテ涙ヲ流サセ給イテ、サテハ観音ヨリ給ハリケル道心ナリ。源空申サズモ御往生疑ウベカラズ。殊更ニ御物語待リケル。

禅勝房はすでに以前から東山の禅室へ参じて法然の説誠に帰依したいた。その法縁から早速東山を訪ね、ことの顛末を報告したようである。

要重なのは「上人是ヲ聞コシ召シテ涙ヲ流サセ給イ」であろう。

出家、法師の身で妻帯を熱望した禅勝房。法然がそれを全面的に許容している事実が明白となる。

法師の妻帯を、貴族出身の僧ならばありきたりなことで、とは前でも触れた。禅勝房はそんな出自だったかも知れないが、法然自身は無縁である。しかも生涯不犯らかった。

聖道門に育った法然は、自らにこそきびしい戒律を課したが、その教説には広くこれを許容し、それどころ夫婦あいださえての信仰の深まりを望んだにちがいない。

教義教説もだが、法然が悲恋の禪勝房ともどもに泣いた。というくだりには、どの法然伝からも感受し得ない肌のぬくもりや温容がつたわってくる。人間の煩惱を隔々まで知りつくし、そこにしっかりと基盤を据えた法然義の深さである。

法然が門下の念仏ひじりたちに許容したのは、この肉食妻帯だけではない。それは許容ではなくて勧奨だったであらう。

法然は、念仏ひじりたちに俗生活を許したが、同時にその「俗」を支えている勤勞に励むことも勧奨した気配がある。僧俗が一体となって称名念仏に励んでこそ、末法末世のなかに仏国土が出現する、と信じていたようである。

二

法然はなつかしげに眼をしばたきながら、禪勝房が語るその後のことどもに聞き入っている。

一条今出川の美女を一夜で喪った禪勝房は、世をはかんで諸国を放浪した。ようやく落着いた先が遠江の蓮華寺だった。岩田郡の見付にある。

蓮華寺とは名乗っても伽藍を未完成、軀体だけが組まれ、あとは野ざらしになっていた。

「俊乗房（重源）どのの門弟にあたる勧進ひじりが発起されたらしいのですが、労銀も途絶え、あまつさえひじり御自身も遷化されて、あとを続ける者にいなくなっていました」

生涯を、この蓮華寺の完成に注ぎこもうと禪勝房は決意した、という。

しかし、禪勝房には資力も然るべき檀越もいなかった。すべてをおのれ自身でまかなわなければならない。「まず木工の技を身につけることから始めました。尾張の国府へ出て番匠について学びました」

「木を削ったり、穴をうがつ技をです」

法然は頼もしげに禪勝房を見つめている。

「性分なのでございましょうか。手前には何か手仕事をしておりませんか？ 気持ちも集中できませぬ。念仏しつつ木工の業にいそしめば、それも如来さまにお仕えすることになるのだらう、と自分に言い聞かせました」

「念仏をしつつ木工の業に励んだのです」
法然は念を押した。

「はい」

「木工をしつつ念仏ではありませんね」

「そのとおりでございます」

「禪勝房。あなたは念仏のカナメに触れ得ましたね。それこれ真の念仏者の姿です」

法然はそこで周囲にひかえる門弟たちを見まわした。思わずも住蓮は顔を伏せていた。痛いところをつかれた衝撃がきた。師と視線を結ぶことが出来ない。

禪勝房は後年、このときの師の言葉を語りつたえている。

——故上人ノ教エアリ。タトヒ余事ヲ営ムトモ、念
仏シコレヲスル思イアルベキナリ。余事ヲシ
シ念仏セント思ウベカラズ

〔一言芳談〕

番匠としての技術をひととおり修得した禪勝房は蓮華寺の工事にとりかかろうとした。手伝いや助っ人は、この地へ住みついて以来教化した近所の善男善女がやってくるはずであった。

「ところが何を勘違いしたのか、国府の役人どもがわたしの腕に惚れこんでしまい、次々と工事をまわしてくるのでございます。そちらに追われて、いっかな蓮華寺が進捗致しませぬ」

「あなたは有能な人だ。おそらく木工の腕前も一流なのでしょう」

「なあに、ただの器用貧乏でございます」

ともかく所期の目的とはだいぶかけ離れた毎日を送っている。こんなことでいいのであろうか。思い余って上洛し、親しく師の法然から教えを請いたい、というのが主目的であった。

「造寺造仏も有難いことではあるが、やはり念仏者にとっては第二義のことです。第一義のことは、縁を結んだ人々の心中に念仏信仰という見事なお仏像を、伽藍を造りあげるのです。だから禪勝房、あなたはその余事をとおして一人でも多くの人間を救わなければなりません」

法然が勧奨した勤労とは、必ずしも唯物的、階級上の労働を意味してはいなかったであろう。もちろん従来 of 寄生虫もどきの布施受施主義は否定したが、念仏シノ余事であって、念仏教化に密着した勤労を尊び重要視し

たのである。

法然の言葉に得心した禪勝房は、清水坂を下ると、東山へ去ってゆく師に別れを告げた。すでに五体に老衰が来はじめた法然だ。歩くうしろ姿も痛々しかった。

ひよっとすると……と禪勝房は眉をくもらせた。師のお姿を拝するの、これが最後になるのではないだろうか。

「貴僧は誰かにみちびかれて大谷の禅室へゆかれたのですか」

法然を見送ったあと、もう一度観音堂内へ戻るべく清水坂を登ってゆくと声に呼び止められた。禪勝房の上洛目的の一つに清水観音堂の内部点検があった。蓮華寺の伽藍建築の参考にするためである。

「熊谷蓮生房どのに連れて行って頂きましたが……あなたはどうですか」

禪勝房は黒衣姿のひじりを眺めまわした。

「申しおくれました。住蓮房です」

「あ、住蓮さま。お名前はかねてうかがっておりました」

「熊谷どのの貴僧が余事を勤めながら念仏することに何

か申しておりましたか」

「何か申すとは？」

「例えば邪道の念仏者とか……」

熊谷直実入道は上品上生の往生を願って強力な念仏修行に励んでいる。脇目もふらぬひたむきさだ。それこそ西方にいます阿弥陀仏に背や尻を向けてはならぬ、と東国へ帰るときも馬首を背にしてうちまたがり、この逆行姿勢で長い旅路をとおしたという逸話の持主である。そんな蓮生房が、禪勝房の余技的なあり方を許すのだろうか。

「先年、東国へゆかれる途次にお立ち寄り頂きました。面白いことをおっしゃって御しました。自分は武士から僧になった。そなたは僧から番匠になった。お互いに道心の根本を求めて、と」

「それで？」

「熊谷どののはしみじみとおっしゃいました。弥陀のお心は限りなく広い。念仏の功德は底知れず深いものじや」と

「うむ、そのとおりですね」

大きくうなずいた住蓮だったが、どこか心晴れぬもの

が残った。その晴れぬものとは何か。気づくまでにかなりの時間を必要としたようである。

禅勝房はこのまま遠江へ帰ると、従来にも増して大工番匠の仕事に精を出したと言われる。しかもこの仕事——余事はあくまでも「念仏シシコレヲスル思イアルベキ」であって、念仏教化を片時も忘れず、多くの善男善女に救済の道を説いた。

正嘉二年（一二五八）八十二歳で寂したとつたえられている。

ところでこの当時における念仏ひじりたちの日常生活だが、庶民の出身者は当然ながら俗業に従事しつつ念仏に励んでいた。都を離れて地方で暮すようになればなおさらで、貴族公卿による被護は期待できなかった。禅勝房が遠江国で大工をしながら教化につとめた生き方も決して特殊な例ではない。

後のことになるが、下総にいて千葉氏の被護を受けていた記主禅師（良忠）が鎌倉へやってきたときは丸裸であった。先住する念仏ひじりたちの家に仮寓して、生活の資を「漁」に求めたとつたえられている。

「漁」——漁夫である。

もちろん記主禅師が自ら沖へ出て魚を獲ったわけではない。下総から随待してきた雑仕たちが（数人いたらしい）毎日舟を漕ぎ出して漁に精を出した。その販売に記主やその妻がたずさわったことも十分に考えられる。

つまり勤労者としての記主禅師像を、われわれは抹消してはならないのである。あるいは鎌倉の辻で大獅子吼していた日蓮上人にしても、生活のためには魚ぐらいは売っていたのかも知れない。やがて信者もふえ、檀越も出現して、寺や庵を建立してもらい、説法主体の日常に変ってゆくのであろう。

記主禅師の場合は、渋谷氏の一族だった石川禅門や大仏時遠などが現れてスポンサーになってくれたようである。

では法然自身の場合はどうだったのであろうか。

三

法然が九条兼実やその他の貴紳頭門の邸に出入して受戒した記事は数多く見られる。当然、この受戒や時としては病氣平癒の祈禱には謝礼が伴ったであろう。それが法然自身及び住みこんだ門弟たちの生活の資となったこ

とは言うまでもない。

さらには、内弟子に善恵房証空や勢観房源智など貴族の子弟もいた。彼らにも生家養家からの仕送りがあったであろう。

だが、それらの資がどこまで法然の私生活を維持し得たかは疑問である。東山の禅室には年とともに房舎が増築され、常時おびたしい寄食者が寝泊りしていたはずである。彼らに食べさせるだけでも経費は馬鹿にならない。

受戒や祈祷による収入、とは書いたが、法然の場合、むやみやたらに、つまり謝礼を第一目的として出かけたとは思われない。現にそんな痕跡はない。

受戒のときはつねに「念仏ひじり」となるための出家遁世であった。病気の祈祷も法縁が抜きさしならなくなった（例えば九条兼実夫人のような）懇意の間柄に限られている。

では法然の身近に勤労生活が存在したのであるうか。建久九年の四月八日付けで、法然は「没後起請文」なる財産遺品分けを書きのこしている。

当時の相続法によれば、被相続人の意志は文書によっ

て明示するのが正式である。だから「没後起請文」は処分状であり、譲り状でもある。

この財産のなかに幾箇所かの土地がふくまれている。

坂下ノ園一所

洛中ノ地一所

高畠ノ地一所

これらの土地が荘園だの寺領などと呼ばれる宏規模のものでないことは言うまでもない。「一所懸命」という言葉が今日にまで残っているように、一所は「ひとくれ」ぐらいの意味しか持ち合わせていない。おそらく法然が受戒の謝礼か、念仏ひじりに遁世した者から譲り受けたものであろう。

むしろあれだけの法然の個人財産が、いや日本中をおおいつくしたと言われる念仏教団の財産が、わずか「三所」かとびっくりするほどである。

その土地の内容だが、高畠ノ地にこんな但し書きがある。

——但シ売買ノ時、半バ直ニ之ヲ与ウ。

この地所が売れたときは、その半金を贈与者である内弟子の感西大徳に与える、と念を押すのである。

この当時、右から左へ売れる土地と言えば畑地しかない。そこに産物があるから価値が生ずる。宅地などは公卿貴族間でこそ売買交換はあったであろうが、庶民には無縁な財産である。

感西大徳は永年にわたって法然の身辺にあって面倒をみてくれたひじりである。その謝礼をこめて贈与するといふのである。

畑地であるこれらの土地で作物を産していた者は誰か。そこにわれわれは法然の身辺に全くささやかではあるが勤労集団が実在したことを推量できるのである。耕作していた者は、おそらく感西大徳を主軸にした門弟たちであろう。法然自身が鋤鋤を握ったとは思われない。

そこから産出する野菜や穀物は微々たる量だったであろう。おびただしい吉水禅室の在泊者の汁の底へかき消えてしまうほどのものだったにちがいない。

だが、量の問題ではないのである。比叡山の黒谷を捨てて巷で生き抜こうとした法然の決意が、新しい宗教改革者の息吹きが、ひとくれの芋や菜っ葉のなかにこもっ

ていた、とわれわれは観取しなければならない。

法では他力を説くが、現実生活では自力自営、誰にも依頼しない法然の姿勢がある。その伝統が禅勝房や記主禅師、はては愚禿親鸞によって継承されたのではないだろうか。

しかし、法然が自ら実践した念仏ひじりの自主独立。それを武器として権力を奪取するという政治的跳躍は法然自身には絶無である。

念仏シシコレヲスル思イアルベキ……であって、王仏冥合とはならぬところが法然浄土教であろう。蓮如が怒号した「飯喰ワズシテ何ノ念仏カ」ではないのである。飯が食べられなくても念仏だけはする。念仏に励みつつ努力して飯も食べられるようにする。

忘れてはならない法然の生き方であろう。

さて、禅勝房と別れた住蓮は清水寺の裏山へ登ってゆく。歩き馴れた道だった。

俊乗房重源に師事して出家の折、この奥にある時雨沢の勢至堂に住まわされたことがあった。そこから清滝寺へかよって大和入道たちの六時礼讃の曲付けに加わったりした。

＜朝の沢雨時＞



この深い山なみは靈鷲山と呼ばれている。釈尊の説法地にちなんだ呼称である。

久々で訪れた勢至堂は半壊しており、見る影もなかった。堂奥に安置した勢至像もどこかへ持ち去られていた。

南都北嶺の悪僧たちが襲ったとは思えない。また襲う価値もない小堂宇だ。誰か浮浪者でも住みついて、破目板を焼いて寒さをしのぎ、本尊仏も米塩の資に処分したのであろう。

住蓮は堂内へはいると坐りこんだ。

見上げる屋根がぼかりと口を開け、暮れなずんだ東山の暗い空が覗けた。床に不吉な響きをかき鳴らして野ネズミが走りまわる。

住蓮はぼんやりと堂内を見まわした。何を考えこむでもなかった。

でもそのうちに、自分はなぜ今じぶんこんな場所へさまよいこんだのか、といふかりはじめた。

かつての一時期、仮住居とした場所、つまり感傷にひたりたかったからか。

たしかに今日、法然のお供をして清水寺へまで登って

きたとき、伽藍の背後につらなる霊鷲山をふり仰いだ。ずいぶんしばらく時雨沢を訪ねていないな、という思いも胸をかすめた。

だが、そればかりとは思えなかった。何かもっと決定的な理由がありそうであった。

いま住蓮の胸中を整理してみると、矛盾した論理が軸となっていた。

決定的な理由が、と言いながらそれが見あたらないのだ。いや、そこをつきつめようとしないのである。

じつは知りつくしていながら、知らんふりをする住蓮だった。

天井穴から覗き暗い空が、いちだんとその影を濃厚にした。もう都は宵であろう。

さあ、ゆかねばならない。約束の刻限が迫っている。前方からせき立てて住蓮の手を引き起そうとする同じ

声が、背後からささやきかけてくる。

時雨沢の朝はいいなあ。澄んだ山気、さわやかな風、妙えなる野鳥のさえずり、今夜は此処へ泊りこむのだ。

そして明日、久しぶりで時雨沢の朝を満喫せよ。

この矛盾。この逃避――

住蓮は今宵の約束を反古にしたかったのである。約束とは、鹿力谷の精舎で営まれる六時礼讃の集りだった。集りそのものは未だいい、六時礼讃も結構である。

いま住蓮の気を重くしているのは、そこで会うであろう同志安楽房だった。彼の顔を見たくない、という嫌悪感が心底で鈍痛のようにうずくのである。

東山へ帰る法然についていかなかった真の理由もそこにあった。東山から鹿力谷へのコースから、なるべく外ずれていなかった。

では、安楽房がそんなに憎いのか。

そこらあたりまで突きつめると、住蓮はとまどうのである。安楽房を嫌悪する思いはどこからも兆して来ない。彼は昨日に変らぬだじな、尊敬に値する愛すべき同志であった。にもかかわらず、いま無性にその安楽房を避けたい。会いたくないのである。

なぜか。

それが不明だから、決定的な理由と知りつつも住蓮は知らんふりをきめこもうとするのだった。

荒れた勢至堂に端座したまま住蓮は深まってゆく闇にすべてをゆだねようとする。

(つづく)

二 編集後記 二

○『浄土』七月号をお届けします。諸物価高騰のアオリをモロに食って、鑽仰会運営（といっても、現在は『浄土』の発刊の一事ですが）のための諸経費の暴騰には、まったく参ってしまいます。こうした状況を何とか脱するためにも、色々と思案をしているわけではありません。今ほとんどなす術がありません。そこで願くば、一人でも多くの新会員を、『浄土』誌の愛読者が一人でも増えればと、ただそれだけが切望されるところとなるわけです。つまりは、『浄土』誌の通常の発行部数を一部でも多く、十部でも多く、百部でも多く……と、できるだけ増刷して、一部の平均単価を安くする以外にないのです。どうぞ会員諸兄の皆様、ご友人やお知り合いの方々にお勧めいただいて、『浄土』誌の新しい読者を、当然法上人鑽仰会への新しい会員を広くご紹介して下さい。心より切にお願い申し

上げる次第です。

○さて、『浄土』八月号には恒例の「暑中御見舞欄」が設定されております。広告掲載費は、今回より一律一五〇〇〇円と、いささがご請求いたすには心苦しい金額に値上げさせていただきますが、これもまた『浄土』誌刊行のための少なからざる後援費となるわけですので、どうぞ広くご応募いただくことを祈り願うわけです。暖かいご支援を重ねてお願いいたします。

○「浄土句集」欄へのご投句のお勧めとともに、皆様からの随想や俳文を広くお願いしております。ことに今秋十一月には、法然上人鑽仰会四十五周年記念式典を企画しておりますこともあり、『浄土』誌においても、読者諸兄の思ひ出話や日頃の浄土念仏信仰に関するご所感などをお気軽にそのままお願い、進んでご投稿いただきたいわけです。——今回の後記は、皆様へお願いに終始してしまいましたが、今後共『浄土』の前進のためにお力添え下さい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

（送料不要）

浄土 四十六巻 七月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十五年 六月二十五日 印刷
昭和五十五年 七月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一十一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

＝最新刊＝

ブツダの生涯と古代インド仏教世界を現地網羅取材

『ブツダの世界』

—The World of Buddha—

東大名誉教授 中 村 元

駒沢大教授 奈 良 康 明 編 著

大正大助教授 佐 藤 良 純

＝写真撮影 丸 山 勇＝

◎仏教学・考古学・インド学の最新学問研究と、現地国考古学局の
学術協力のもと一年半の現地撮影取材とによって成った、わが国
で画期的な国際大型出版。

インド亜大陸未踏の領域に入って精密に把えた900点のカラー・
モノクロ写真を駆使し、釈尊の生涯と古代インド仏教の歴史を、
学界権威が900枚に論述。

最大規模の取材と最高水準の調査研究を集大成した記念碑的図
説インド仏教文化史。

B4変型判 上製クロス装 美麗貼函入 5色刷カバー付
カラー写真212頁 本文一色204頁 全416頁
現金定価 32,000円

発 行 学 習 研 究 社 〒145

東京都大田区上池台4-40-5
TEL 03 (720) 1111 内線 2737